

佳作

## 「知ったかぶり」から学んだこと

千葉県流山市立八木中学校二年 加瀬悠人

私が男子バレーボール部に入ったのは、中学に入  
学して直ぐだった。バレーボールのことはほとんど  
知らないで、ついていけるのか、どのくらい厳し  
いのか不安だった。ただ、見栄を張っていたのか、  
分からなくても「大丈夫です」「分かっています」と  
虚勢を張った。先輩が優しく声をかけて、構えを直  
そうとしてくれても「自分でやってみます」と受け  
流した。分からないと認めるのが、負けを宣言する  
みたいで怖かった。

そのことが一気に出てしまったのが、三年生にと  
って最後の大会の日だった。会場は市内のアリーナ。  
集合時間と移動手段は、丁寧に書かれたプリントで  
配られていた。けれど、僕は「分かっているよ」と鞆  
の底に放り込み、読まなかった。前日、先輩が、  
「移動手段分かる？ 教えるよ。」  
と言ってくれたのに、僕はいつもの調子で、

「大丈夫です、だいたい分かります。」

と言いつ張った。結果は最悪だった。自転車移動す  
ると決まっていたのに、知らなかった。部活の友人  
に聞いても分からなくてたまたま通りかかった顧問  
に聞いてみた。それまでにも同じように「知ったか  
ぶり」をして、先輩や周りに迷惑をかけていた。体  
育館の隅で、顧問の先生が静かに言った。

「知らないのは悪いことではないけど、知ったかぶ  
りはするな。」

言葉が胸に落ちた。叱られたよりも、核心を突か  
れてびっくりした感じ。僕は知らない自分を守るた  
めに、一番大切な「仲間」を傷つけていたのだ。先  
生は続けた。

「分からないなら、聞け。迷うなら頼れ。チームは、  
そのためにある。」

その瞬間、ずっと緊張していた気持ちたちが溶けた気  
がした。心のどこかで、何かが変わった。

これが、私の「心が動いた瞬間」だった。帰り道、  
自転車で仲間の最後を歩いていきながら、言葉が出  
てこなかった。景色がいつもより明るく見えた。も  
しまだ分からなくなったら、今度は迷わず聞くだろ  
う。「すみません教えてください」。それは恥ではな  
い。次へ進むために必要なことだから。

翌日から、僕は態度を改めた。返事や挨拶、仲間  
を見て声をかけるようにしていった。そうしていた  
ら、周りも自分のことを受け入れてくれて優しくな  
っていった。先輩からは、

「教えようとしたら『大丈夫』って言うからさ。」  
と言われて、知らないことを隠すための「大丈夫」  
は、周りの優しさをはね返すことだった。受け取ら  
なかった手は、差し出した人にも失礼になる。その  
当たり前にやっとなつていた。

今は、学年が上がって後輩ができた。自分が助ける  
番になって分かることがたくさんある。あの時の先  
輩がどんなに大変だったのか、実感している。知ら  
ないことは悪くない。けれど、知ったかぶりは、仲  
間との信頼を遠ざける。先生の一言が、私の心の中  
を入れ替えた。